

# 琉球大学学術リポジトリ

## 農産物の価格はどう動いているか (3)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福仲, 憲, Fukunaka, Ken メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/21199">http://hdl.handle.net/20.500.12000/21199</a>

## 農産物の価格はどう動いているか(3)

さきに136号では、

- ① 農産物の需要（消費量）は主食類が伸びないのにくらべて野菜，果物とくに肉類が著しく伸びていること。
- ② 一方，供給（生産量）は畜産物が急激に増えて野菜，果物類は余り伸びていないこと。
- ③ このような需要と供給の動きに対して，肉類の価格は安定し野菜類の価格は不安定であ

ること。

- ④ そこで畜産物についてみると，沖縄での肉類の価格は殆んど「豚肉」に左右され消費者価格とは同じ傾向で変動しているが，仔豚の価格は大巾な変動があり不安定であること。などをみましたが，ここでは野菜類の流通と価格の変動について考えてみることにしたい。

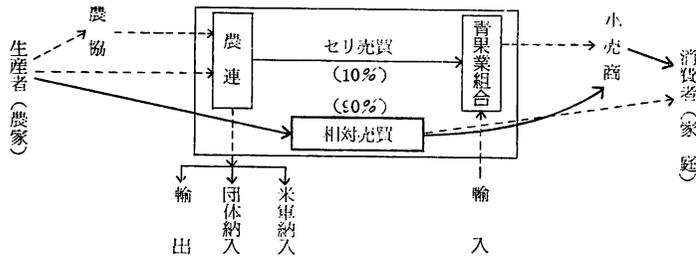
## 9) 野菜はどのように取引されているか

なぜ、野菜の価格は売る側、買う側のいずれにとっても不安定なのか。これは単に栽培技術上の問題だけでなく流通・取引の問題にまたがって検討されなければならないであろう。われわれの所得水準が高まるにつれて野菜類の消費量が増えていることは前にも述べたとおりであるが、その必要とされる総量や実際に消費されている総量をとらえることは他の農産物にくらべて難しく、その方法や理解の仕方にもいろいろ問題が多いとされている。いま流通の面に限ってみても野菜類はと

くに生のままで新鮮さを必要としその種類も多く相互間の代替性（他の野菜があればそれで間に合わせることも高いために価格や取引の上で複雑さをもたしている。またそのことが生産の面にも影響している。

この複雑な生産と流通の循環は、「市場法」もなく価格政策の遅れている沖縄では殊に農家が自給野菜の生産からサトウキビやパインの生産に単一化するにつれてますます問題となりつつある。現在、野菜の取引は農連（琉球農業協同組合連合会）が経営している農連中央市場を唯一の組織として第6図のように行われている。

第6図 農連中央市場における野菜の取引



ここでは那覇近郊の豊見城をはじめ南部、中部、北部の主要な生産地から凡そ500戸前後の農家によって毎朝8～9千ドル相当の野菜が搬入され、年間300万ドル余りの野菜が遠くは北部や離島の一般家庭の台所へと運ばれている。他に米軍向けの清浄野菜が主要な生産地の26の指定組合によって園連（沖縄園芸農業協同組合連合会）および6つの商社を通じて年間凡そ30～40万ドル程度出荷されているが、一方、野菜類の輸入量も毎年増加し年間200万ドルを超えるようになった。

※野菜を農連中央市場に搬入している主な地域

豊見城、真和志、南風原、具志頭、真壁、小禄、喜屋武、東風平、高嶺、兼城、米須、大里、知念、玉城、糸満、首里、浦添、中城、本部、その他

※米軍向けの野菜を出荷している主な地域

国頭、今帰仁、具志川、勝連、美里、北中城、南原、豊見城、佐敷、武富、など

このような取引事情のもとで、野菜の需要が伸びている割に供給は伸び悩み、輸入野菜によって消費がまかなわれているが、今後は生産技術の向上と同時に取引の組織や方法の改善が望まれている。

## 10) いつごろどんな野菜が出廻るか

農連中央市場に搬入される野菜は凡そ40種を越えるが、野菜は栽培期間が短くまた果実を稔らせて取ることも少い。そのうえ代替性をも考え合えると栽培技術上の収穫適期はもちろん市場に出廻る最盛期と価格の低落期とは実際にはそのまま一致しない場合が生じている。

第8表は年間の搬入額の多い野菜を10種だけ選びそれぞれの搬入量と価格をみたものであるが、それぞれ価格がもっとも高い時期は殆んど9月と10月に集中している。この時期には野菜は全般的

第8表： 搬入量の多い主な野菜の月別の量と単価 (単位: 百kg, ×セント) (農連中央市場: 1966年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計 (平均)	
キヤベツ	搬入量	1,232	685	682	1,337	1,826	564	149	348	89	345	1,850	<b>4,827</b>	13,939
	kg当価格	8	13	13	10	9	25	37	37	▲40	38	22	11	14
山東白菜	搬入量	330	215	397	565	296	419	972	1,190	1,180	<b>2,617</b>	1,555	1,291	11,060
	kg当価格	9	12	9	8	15	21	17	21	▲35	11	16	25	17
冬 瓜	搬入量	30	358	840	261	2,026	1,518	<b>2,491</b>	2,263	733	732	215	5	11,475
	kg当価格	17	17	12	15	10	17	15	14	▲26	20	14	20	15
美濃早生 大 根	搬入量	558	254	252	310	879	533	141	158	93	1,442	<b>3,662</b>	2,378	10,364
	kg当価格	13	11	11	12	8	18	25	▲27	25	25	13	17	15
胡 瓜	搬入量	133	91	223	379	596	315	298	<b>1,798</b>	640	562	561	315	5,915
	kg当価格	35	▲38	32	25	18	28	28	17	29	▲40	23	31	25
人 参	搬入量	899	1,222	1,948	<b>2,121</b>	1,546	1,674	422	34	0		163	1,262	11,295
	kg当価格	10	9	6	6	8	19	25	33	▲37		33	24	12
結球白菜	搬入量	931	546	817	353	198	186				16	1,563	<b>2,254</b>	6,868
	kg当価格	13	15	11	15	18	13				▲46	21	16	17
さ や 豆	搬入量	365	114	414	371	356	168	29	0		104	863	<b>945</b>	3,731
	kg当価格	23	36	30	26	23	37	37	▲58		▲59	30	30	30
ご ぼ う	搬入量	37	38	79	194	180	247	263	<b>1,484</b>	242	199	109	121	3,198
	kg当価格	30	32	30	29	27	28	28	31	▲34	29	29	▲38	30
た い 菜	搬入量	150	81	217	206	151	120	376	657	612	<b>1,679</b>	841	597	5,693
	kg当価格	9	12	9	8	15	21	18	21	▲35	11	14	21	17

備考：太字は搬入の最盛期

▲印は価格の最高期

に不足して品うすになり、気候的にみてもいわゆる端境期となっている。

ここに市場における野菜搬入量の一つのウィーク(谷間)が形成される。

これに対して3月、4月、5月は野菜類の価格がもっとも安く、それぞれ最盛期ではないが全般的に出揃って種類、量の一つのピーク(山)が形成される。

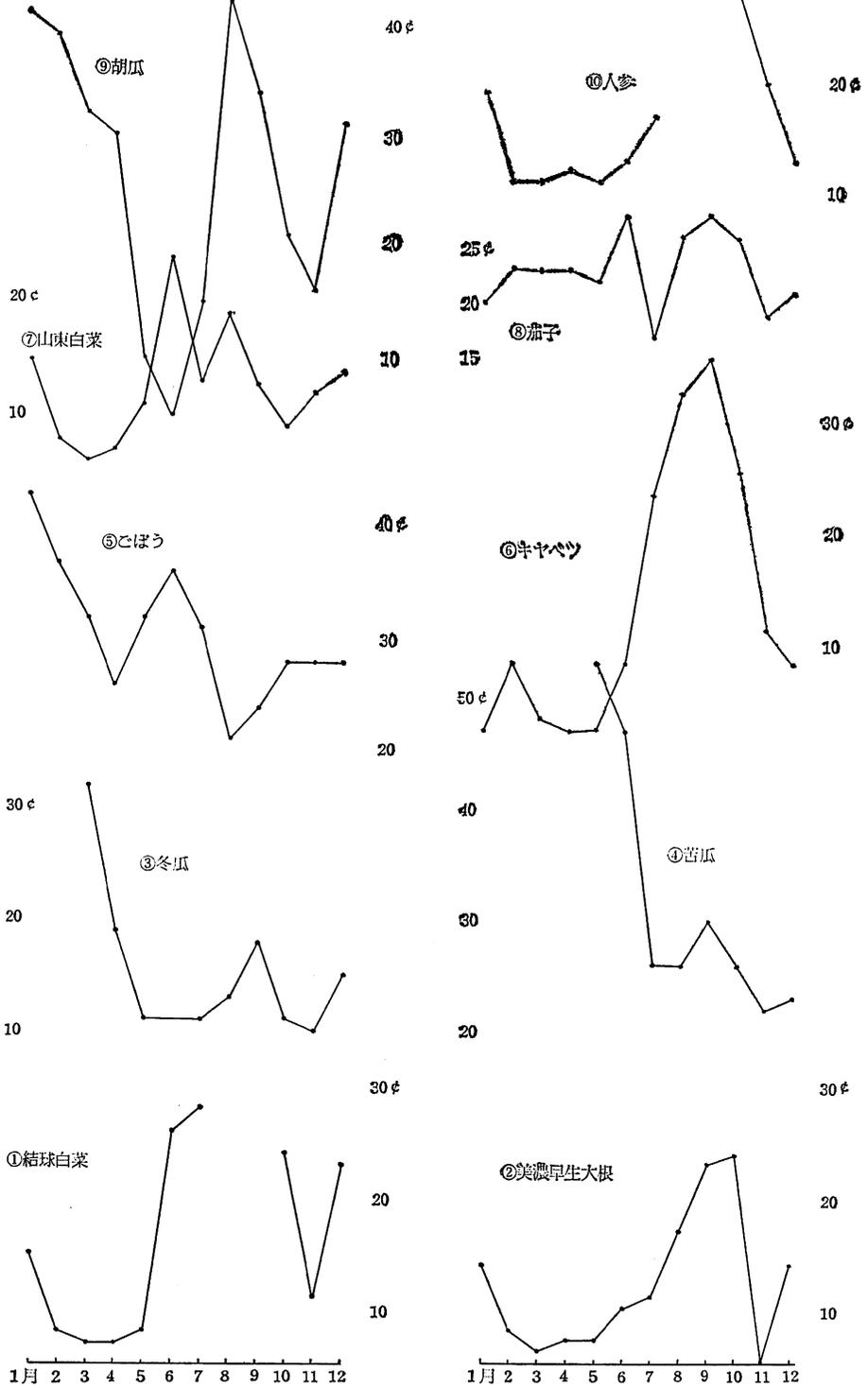
このように沖縄における野菜の出廻りは1つの「ピークとウィークのある不均衡な型」としてとらえられ特に夏から秋にかけてのウィーク時における野菜不足は大きな問題となっている。この時期には果菜類のトウガ、キュウリ、ニガウリと葉菜類では早「きのサントウハクサイ、タイサイがあるだけで殆んど輸入野菜に依存している。

## 11) 野菜の価格はどのように変動するか

第7図は1965年に市場搬入額の多かった10種類の野菜について価格の動きをみたものであるが、年間の価格変動がそれぞれ如何に激しいものであるかを如実に示している。しかしこのように複雑で不安定な変動ではあるが、上の第8表でみた搬入量の場合とは逆にこの価格の変動にも一つのピークとウィークが形成されている。つまり春の搬入量の変動におけるピークは価格の変動においてはウィークとなり、また夏から秋にかけての搬入量の変動におけるウィークは価格の変動においてはピークとなっている。

更に第8表から種類別の搬入量と価格との関係を見ると、夏型野菜のトウガ、キュウリ、およびニンジンそれぞれ出廻り最盛期よりも遅れて価格が最高値となるのに対して、その他の冬型・春型

第7図 主な野菜の価格の動き（1965年）



野菜の葉菜・根菜類ではそれぞれ出廻り最盛期に先がけてそれよりも早い時期に最高値となっている。つまり価格のピークとなる端境期をはさんでその前後からそれぞれの最盛期をそこに近づけるような生産の傾向を示している。

この二つのタイプにみられる傾向は今後の野菜生産における抑制栽培や促成栽培の課題であると同時に、また価格の安定をはかり輸入依存を緩和するための課題であるともいえよう。ただ従来の自然条件による最盛期や端境期を固定的なものとして直ちに需要と供給の不均衡や価格の不安定を宿命的なものとして考えることを改め、むしろ需要や価格条件に合致した生産ができるように積極的に技術の改善をはからねばならない。

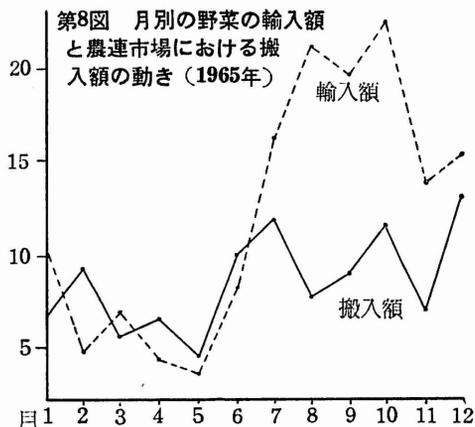
## 12) 野菜はどのような時期に輸入されるか

第8図のグラフは野菜の量と価格との積（搬入額）で表したものであるが、これまで野菜の搬入量と価格の動きは一つの「ピークとウィークをもつ不均衡型」としてみてきたように輸入野菜についてもこれを基にして理解することができる。

まず3月～5月には野菜の出廻りが豊富でも価格が安くなり、また7月～10月には品うすではあるが価格が高くなって、結局「搬入額の変動」は出廻る量が多いか少ないか、と同時に価格の変動によって左右されており、価格のように大巾な変動はないがやはり緩やかなピークとウィークをなしている。

一方、「輸入額の変動」はそれ以上に価格の変動がハッキリ表れ一層鋭いピークとウィークをなしているが、これには凡そ年間80万ドル前後と推定される米軍向けの輸入野菜も含まれているからであろう。

しかし野菜類の輸入は毎年増加して1966年には200万ドルを越え島内産野菜の市場搬入額を上廻



第9表：主な輸入野菜の輸入単価と輸入額（1966年）

	1kg当りの価格	輸入額	輸入の多い期間の輸入額
馬鈴薯	10¢	750,894\$	年中輸入
タマネギ	9	325,494	年中輸入
トマト	26	179,735	6月～11月＝164,303… 91.4%
スイカ	14	149,075	6月～9月＝149,075… 100.0%
ニンジン	16	147,686	8月～12月＝142,950… 96.7%
キヤベツ	13	141,642	7月～10月＝118,388… 83.5%
レタス	35	98,091	5月～10月＝ 96,213… 98.0%
ピーマン	38	50,311	7月～11月＝ 43,492… 86.4%
ゴボウ	23	45,278	10月～2月＝ 37,505… 82.2%
カボチャ	10	30,508	6月～10月＝ 29,288… 96.0%

っているが、その殆んどが夏から秋に集中して輸入されていることは第9表でも知ることができる。輸入額の多いものから10種類を選んでみたのが第9表であるが、それらの合計だけでも全輸入額の95%を占めているので残りの30～40種の輸入額は僅少である。ただいづれも同じ時期の農連市場における価格よりも安い価格で輸入されているのは注目すべきである。こうして島内産の野菜が絶対的に不足し価格の高くなる8月～10月にかけて安い価格で大量の輸入野菜がわれわれの需要を満たしていることになる。ちなみに果物や花類まで含めると園芸農産物の輸入額はすでに年間600万ドルを越している。（福中憲）